

ニューズレター

第16号

特集 「ダンスとスポーツ」

目次

巻頭言

「二卵性双生児としてのダンスとスポーツ」

大貫秀明（駿河台大学 現代文化学部 教授） 2

関連エッセイ

「競技と舞踊のあいだ——アーティスティック・スポーツという未開拓領域」

町田 樹（慶應義塾大学環境情報学部・法政大学スポーツ健康学部 非常勤講師） 4

「舞踊らしさを追い求める新体操というスポーツ」

川瀬 雅（環太平洋大学 次世代教育学部 こども発達学科 助教） 6

私の研究テーマ

「舞踊人類学の新天地へ —— 暗黒舞踏とアフェクト」

ケイトリン・コーカー, Caitlin Christine COKER（京都大学 人間・環境学研究科 特定講師） 7

「現代ダンスにおける他者の言語」

呉宮百合香（早稲田大学文学研究科 博士後期課程／日本学術振興会 特別研究員DC1） 9

「私の研究テーマについて」

石渕 聡（大東文化大学 教育学科 准教授） 10

舞踊関連書籍紹介 11

事務局だより 12

掲示板 13

編集後記

巻頭言

二卵性双生児としての ダンスとスポーツ

大貫秀明（駿河台大学 現代文化学部 教授）



遠い日の思い出から：その①

スニーカーがダンス公演のステージに突如として現れた時、それは表層的な異化効果狙いを越えた、なんとも奇妙な衝撃を覚えた記憶がある。それは、その足もとに、行き場のないモダンダンスに関係する著名な舞踊家の名を冠した「スタイル」の狭隘さに腹立たしくも、はけ口の見つからない窒息感の表出とも受け止められたからかもしれない。動きにまとりつく意味を振り払うかのような、カラッと乾いた動きがステージを埋めた。

昨年鬼籍に入ったポール・テイラーのウィットに富み、気品も程よくまぶしたアスレティック感漂う当時のダンス（「Aureole」とすこし時間は空くが「Esplanade」など）、そしてポスト・モダンダンスの先鋭たちのゆるい雰囲気や漂わせながらも十分に挑発的であった一連の行為などに精神的な下支えをえて、先のスニーカーの群れは、以後ダンスの場にそれこそ足早に登場してきた。ペDESTリアン・ムーブメント（歩行者のしぐさ）はそうした流れの中で、やはりステージの常連となり、その歩行者風のしぐさはやがてその動きに加速をえて、走り、跳び、転がるようになった。そんな時代の移ろいの中に、ブルックス、ブルックリン方面からヒップホップ文化がマンハッタンに流れこみ、NY発のダンスはまたすこしそのすがたとかたちを更新し、世界各地に飛び火していった。

遠い日の思い出から：その②

「その動きは体操の動きに見えちゃうね・・・」などと、遠い日のダンススタジオでは指導の先生がそう口にしては生徒さんたちに動きの修正を施していたことが時おりあったように記憶している。さて、その指摘のポイントはどこにあったのだろうか？

大括りのはなしになるが、ダンスでの動きと、例えば体操での動きは似て非なるところがある。ひとつはシェーブ（かたち）の面で、そしていまひとつの顕著な点ではつなぎ（トランジション）の面で。前者では、例えばノーテーション（動きの譜）で腕がいわゆる2番のポジションを示しているとしよう。そこで、その譜を読める（理解できる）ダンサー（バレエ、現代ダンスなど）が体現する2番のアームと、体操選手が両腕を体軸から両横に据えるかたちでは、その相貌（「見え」・関連部位による空間処理の程度）はだいぶ違うはずである。どちらが正しい・どちらが間違いとかの問題ではなく、どちらも相互に正当な理由をそれぞれ有している。

（それらについての説明は別の機会に譲らなくてはならない。）また、後者についていえば、アクション（例：ジャンプ、回転など）に至る前の「準備（preparation）」とアクションからの「回復（recovery）」時に、動きの質がストレートに視認化できるのが常であることから、こここそがダンスにおける動きの提示の「肝」とされる。ちなみに、体操などスポーツでの大半の動きではその「準備」と「回復」の扱いはあまり気にしないのが常で、そ

ここには空白の時間（ごく短めの休止）が入り込む。しかしながら、ダンスではそうした身体マナーはあまりよろしくないとされているのである。そんなことから、先の遠い日のダンススタジオの先生は、必要に応じて生徒さんたちにやさしい言葉がけを通して、ダンスでの動きのあって欲しいすがたを身をもって説いていたのかな、と今更ながら思う次第。準備・アクション・回復の縫い目のない連鎖とそこに充溢する内的なエネルギー（R.ラバンの言うところの「エフォート」）こそがダンスムーブメントの命であるとされてきた。同じ身体運動であるにもかかわらず、なんとややこしいはなしである。しかしながら、こうした観点とその解釈はそろそろ賞味期限切れ（「オワコン」）に近いことも今となっては関係者の多くは気づいているように思われる。

今どきのダンスを想う：non-institutionalizedなダンスを支えるスポーツ的感性

ひとりの中期高齢者の妄想かもしれないのだが、ダンスはいつのまにか学校と稽古場を離れ、かつ「教える・習う」関係の維持を放棄してしまった、、、、ような気がしている。それは、現在のこの国における初等中等教育課程の学校現場で声高に謳われるアクティブ・ラーニングの実践を先取りするかのように、主／客の立場を意識することなくフラットな相互関係の維持、他者との協働をベースに成果を求める姿勢をすでに習得したように映る。あちこちのワークショップに参加をし、多くの他者との接触を通じて自己の輪郭を作り上げてみることに意義を感じているダンス・クリエイターは少なくとも見受けられる。そうした場において試される学びの原材料は、hip-hop系の動き、サーカス芸にルーツがありそうな動き、武術系のそれ、民族舞踊系のそれ、ヒーリング系のそれ、そしてそこに加わるのがアスリート系というスポーツ系の身体を取り込み、そんな印象がある。ことに、スポーツ系の動きは身体所作の合理性とスピードの体現を示唆することから、今の時代精神（Zeitgeist）を表現するにとっても肯定的に受け止められているようだ。ダンスの生成の場は稽古場からアリーナへ、そしてフィールドに移ったともいえる。ともかく、総じて「スポーツ」という身体文化が今後のダンスクリエイションに与えるインパクトは計り知れない、そんな感じを強く抱かせる。

これからのダンス環境を想う

定期的に送られてくる海外からの情報誌、機関紙をめくっていると、最近では「Dance Science」なるワードが「踊っている」ことに気づく。どうやらダンスをスポーツサイエンス研究同様にバイオメカニクス、運動生理学、栄養学、スポーツ心理学的観点からアプローチしようとしている波が起きていることが察せられる。要は、定量的にダンスをとらえようとする傾向が見られるということなのであろう。ちなみに、そのゴールは「artistic athlete」の育成と謳われたりしているようだ。すなわち、ダンスの世界はスポーツを動きの発見、作品創造の「古くて新しいツール」としてのみ扱うのではなく、より科学的な態度の前景化を意図している動向の在りようがうかがえる。（註：こうした傾向の背景には、おそらく関係諸機関からの助成金の獲得等の問題も絡んでいるのだろう。）

これからのダンス、とりわけ現代ダンスは、例えばあの歌舞伎が大胆かつどん欲にも時代の先端を行く演劇形式をやすやすと取り込んでしまうように、よりどん欲に身体表現文化の可能性を試す工夫と気概を広く示して欲しいものだ。また、その可能性へのチャレンジにリミッターを外すくらいの気持ちで臨んで欲しい。そこで、その成否のカギを握る要素のひとつに、されど決して軽視できない要素として（広義の）スポーツ文化の内包化がある。スポーツがダンスにもたらす進化の伸びしろは計り知れない。というのも、そもそもダンスの動きとスポーツのそれは出自・母体を同じくし、いうなれば二卵性の双生児と見なせる部分を多く有するからだ。そのような両者が二項動態（dynamic duality）でこそあれ二項対立（dualism）の存在であるはずはなく、よってその可能性を試すには関わる者の能力次第といえるのではないだろうか。

最後に、斯界の者として、こうした諸状況を俯瞰的に見つめながら、折々懸念を抱いてしまう事がある。それは、これからのダンサーなりダンス・クリエイターはどこを自身のMother Church（精神の拠り所）と定めるのだろうかということである。そんなものは不要です！と軽くあしらわれそうな気もしないではないが。（令和元年5月1日 記）

関連エッセイ

競技と舞踊のあいだ ——アーティスティック・スポーツという未開拓領域

町田 樹
(慶應義塾大学環境情報学部・法政大学
スポーツ健康学部 非常勤講師)



© Japan Sports

I. アーティスティック・スポーツとは何か

スポーツは芸術か、否か——このような問いに対して、皆さんはどのように答えるだろうか。これはかつて美学の領域で論争を巻き起こしたテーマである。旗手となったのはD・ベストとS・K・ワーツで、「スポーツは芸術である」と主張したワーツ (e.g. Wertz, 1979) に対して、「スポーツは芸術ではない」とベスト (e.g. Best, 1980) が批判したことに端を発する。ただし、スポーツが芸術であることを否定するベストは、決してスポーツが美的であることまでも否定する者ではない。彼は、むしろスポーツは芸術とは異なる美的性質を備えているもので、その美的性質はスポーツ独自の美的規準によって判断されるべきだと考えたからこそ、スポーツと芸術を区別するのである。この論争に関して、あえて個人的な見解を示すのであれば、筆者も基本的にベストの説に賛同したいと思う。なお、ベストとワーツを中心に繰り広げられた一連の論争について詳しくは、樋口 (1989) を参照されたい。

だが一方で、スポーツ界にはそう簡単にスポーツであるか、芸術であるかを割り切れない領域が存在する。その領域とは、フィギュアスケートや新体操、バトントワリング、ダブルダッチ等の音楽が伴うパフォーマンスを通じて競技を実施する「アーティスティック・スポーツ」(以降、「AS」と略記する) である。一般的にスポーツは、野球やサッカーなどの「対戦競技」、陸上や水泳などの「記録競技」、フィギュアスケートや器械体操などの「採点競技」の三種類に大別される。このうち採点競技に該当する多くの競技では、パフォーマンスの「美しさ」の程度が勝敗を分ける要因の一つとなる。し

かし、採点競技と一口に言っても、技の難度(ディフィカルティ)と完成度(クオリティー)によって勝敗を決する器械体操と、技のみならず振付とそれを表現する技量が評価の対象となるフィギュアスケートでは、明らかに競技形式が大きく異なっている。筆者は、ともすれば同一の採点競技として混同される傾向にあるこれらのスポーツを明確に区別し、後者の「評価対象となる身体運動の中に、音楽に動機づけられた表現行為が内在するスポーツ」をASと定義してきた(町田, 2018a)。ちなみに、『21世紀スポーツ大事典』(大修館書店, 2015年)に立項されているスポーツ全237種目のうち、ASに該当するスポーツは、五輪正式競技であるアーティスティックスイミング、新体操、フィギュアスケートの他に、インラインスケート(アーティスティックローラースケート)、エアロビック、車いすダンス、スポーツカイト(バレエ種目)、ダブルダッチ、ダンススポーツ、チアリーディング、なわとび(ロープスキッピング)、バトントワリング、ラートの13種目存在する。

こうしたASにおける身体運動は、頻繁に「表現する(express)」や「踊る(dance)」といった動詞で言い表される。実際、ほぼ例外なくAS競技の採点基準には「振付の質」や「音楽解釈」、「個性や創造力の表現性」、「独創性」、「フォーム(身体そのものと動き)の質」などの項目が盛り込まれている。そのため選手は、勝負に勝つために、あるいは純粋に表現するために、あらゆる手段を尽くして音楽を身体運動で表現するのである。

このように考えてみると、ASの身体運動は舞踊に限りなく近い性質を有することに、改めて気づかされる者も多いのではないだろうか。むしろASが(その踊りとしての「クオリティー」はともかくとしても)舞踊でないとの理由を説明する方が難しいようにも思えてくる。確かにスポーツは芸術ではないのかもしれない

い。だが、ASに関しては競技（スポーツ）と舞踊（ダンス）のあいだに存立するために、スポーツで唯一「芸術」の域に入る可能性を秘めた身体運動であると言えるだろう。ところが一方で、こうしたジャンル横断的性質が障壁となっているのか、ASをめぐる身体運動の美的性質については、スポーツ美学と舞踊美学のどちらからも相手にされておらず、学術的に未開拓の領域なのである。

Ⅱ. アーティスティック・スポーツ研究の可能性

筆者は近年、舞踊やASの著作権法学的研究に取り組んできた。従来、舞踊（正確には舞踊の振付）は著作権法第十条一項三号に「舞踊又は無言劇の著作物」と例示され、権利の保護対象となってきたのだが、スポーツは保護の対象とは考えられてこなかった。だが筆者の研究の結果、あらゆるスポーツの中でもASに限っては、「舞踊又は無言劇の著作物」に該当し得ることが明らかとなった（町田, 2019）。それはすなわち著作権法という社会制度上、ASは舞踊と同様の知的財産に含まれることを意味しているのである。

また筆者は同時に、文学・芸術学理論や舞踊学理論を応用して、ASの代表格であるフィギュアスケートのパフォーマンスの批評を試みている（町田, 2018b; 2018c; 2017a; 2017b）。筆者は以上の研究活動を通じて、ASは舞踊の一ジャンルに相当するという思いをより強くしている。

そしてこのようにASが舞踊であるか否か、もしくはASの身体運動はいかなる点で美的であるのかを考えることは、すなわち舞踊とは何かという舞踊学における根源的な問いに挑戦していく作業でもある。その意味において、筆者はASを対象とした舞踊学的研究は、スポーツと舞踊の双方をより深く理解することに繋がるのではないかと考えている。

Ⅲ. むすびに

実はいま、競技（スポーツ）と舞踊（ダンス）の融合は、刻一刻と進行している。2024年のパリ五輪では、ブレイクダンスが新たに五輪の正式競技として採用される可能性がある。国際体操連盟の会長である渡邊守成氏は、体操界とヒップホップダンスやチアダン

スなどの舞踊界のコラボレーションを模索している。こうしてスポーツ界の最新動向を追ってみると、今後、間違いなくASと舞踊は、より一層密接にリンクしていく身体運動文化となることが予想される。

確かに、ベストの言う「スポーツ特有の美的性質」はスポーツ美学の領分である。だが少なくとも、舞踊的な美的性質を明らかに兼ね備えているアーティスティック・スポーツについては、舞踊学会でこそ研究対象となるべき身体運動であると言えるのではないだろうか。

【主要参考文献】

Best, David (1980) “Art and Sport,” *Journal of Aesthetic Education*, Vol.14, No.2, pp.69-80.

樋口聡 (1989) 「スポーツは芸術か?——ワッツーベスト論争」『体育・スポーツ哲学研究』第11巻第1号, pp.27-39.

町田樹 (2019) 「著作権法によるアーティスティック・スポーツの保護の可能性——振付を対象とした著作物性の画定をめぐる判断基準の検討」『日本知財学会誌』第16巻第1号, 19年6月発行予定（印刷中）。

町田樹 (2018a) 「スポーツ的美と芸術的美の享受」, 原田宗彦・藤本淳也・松岡宏高編『スポーツマーケティング改訂版』大修館書店, pp.75-78.

町田樹 (2018b) 「解き放たれる身体——デニス・テン《ザ・シルクロード》」『KISS & CRY SPECIAL BOOK 町田樹の地平』東京ニュース通信社, pp.78-82.

町田樹 (2018c) 「音楽に触発される身体——町田樹《交響曲第九番》」『KISS & CRY: 2017-2018 シーズン総括&2018-2019シーズン展望号』東京ニュース通信社, pp.98-101.

町田樹 (2017a) 「古典美と規範——ジョン・カリー《ドン・キホーテ》」『KISS & CRY: 別冊 Dance! Dance!! Dance!!!』東京ニュース通信社, pp.58-61.

町田樹 (2017b) 「衣裳と相貌——オクサナ・バイウル《スワン》シリーズ」『KISS & CRY: 2017全日本選手権・全力応援号』東京ニュース通信社, pp.66-69.

Wertz, Spencer K. (1979) “Are Sports Art Forms?,” *Journal of Aesthetic Education*, Vol.13, No.1, pp.107-109.

関連エッセイ

舞踊らしさを追い求める新体操というスポーツ

(環太平洋大学 次世代教育学部

川瀬 雅
こども発達学科 助教)

新体操は、身体と手具と音楽の調和を特徴とするスポーツである。舞踊と新体操は、異なるものだが、両方を経験した私には、何か共通事項があるように思うし、新体操は確実に舞踊の影響を受けていると言っていい。実際に多くの新体操クラブの練習において、バーレッスンが取り入れられており、新体操選手はバレエの基礎を身に付けようとする。演技で使用する音楽には、クラシック・バレエの名曲や、ミュージカル曲や、ダンス映画で使用された曲が多く採用される。舞踊と新体操が異なるのは、新体操はスポーツであるため採点規則のもと実施されるという点である。個人競技においても団体競技においても「ダンスステップ」を取り入れることが新体操採点規則に示されている。また採点規則では、何かを表現することを求めており、得点として評価される。

しかし新体操はスポーツであるため、何かを表現することや「ダンスステップ」は最低限の実施になる。前述した音楽やダンスステップは、全て得点のための選択であり、採点される者が採点する者に対してわかりやすく演技のテーマを伝えて得点を得るための技術の一部である。

イリアナ・ラエバ（元ブルガリア・ナショナルチーム・コーチ）は、新体操と舞踊について次のように語っている。「もともと、新体操は「形式の中に窒息してしまったクラシック・バレエを打破して、人間性を取り戻す舞踊」としてロシア革命に登場し、20世紀から本格的に始まった舞踊です。」ここでいう形式とは、19世紀までのバレエであり、トゥシューズを履いたダンサーがロマンチックな物語を演じることだろう。この形式を打破するために、新体操は始まり、しかも舞踊であるとイリアナ・ラエバは語っているのだが、この出来事には20

世紀を代表するダンサーであるイサドラ・ダンカンが大きく影響していると考えられる。イサドラ・ダンカンは、彼女が自身の理想の舞踊学校をドイツのグリュネヴァルト、フランスのベルヴェ、ロシアのモスクワに創設し、子供たちに無償で教育を施していた。そこで舞踊のみならず、身体表現の形式を大きく変革したとされている。伝統的な舞踊以外が生まれなかったロシアに、イサドラ・ダンカンによって新たな舞踊が登場したといえる。このように形式的なクラシック・バレエを否定し、新たな舞踊として出発した新体操であったが、自らは形式を持つようになり、そのなかでしか展開することができなくなったのである。

新体操採点規則は4年に1度ルールの変更が行われているが、2000年代になってからは理想的な新体操を追い求めるように変化してきた。なかでも2001年に改訂された採点規則は、「新体操の芸術性が失われた」と批判が相次ぐものだった。2001年までの採点規則で行われた演技は、冒頭で示した通り「身体と手具と音楽の調和」によって実施されており、手具の動きをモチーフにして物語を表現したり、身体の難度から次の動きまでのあいだに、得点にならない動きで音楽を表現したりする余裕があった。2001年の採点規則で定められた演技は、個人演技の1分30秒の間に身体の難度（ジャンプ、ターン、バランス、柔軟）を最高12個まで入れることができ、さらに、身体の難度はいくつか繋げて行うことが可能だったため、演技の内容は身体の難度の羅列になり、それまで新体操が大切にしてきた舞踊的な表現は失われた。新体操は、「身体と手具と音楽の調和」と、その出発点である「舞踊的」であることがその存在意義であると考えられる。2001年からの採点規則が適応されている当時は新体操の中で舞踊的な側面が失われていったのだが、そのよ

うななかでもアンナ・ベッソノバ選手は、舞踊的な側面を持って演技をする選手だったと子どもながらに記憶している。アンナ・ベッソノバ選手は、3番手に終わることの多い選手だったが、彼女が優勝できないことを問題視する関係者も多く、現在も新体操ファンにおいて人気が高い選手のひとりである。

近年最もバランスが取れており、舞踊的な表現も含め新体操らしい演技ができていたのは、2013年に改訂された採点規則だといえる。選手ごとに演技の特徴があり、2016年のリオオリンピックは楽しめた。中でも聴衆の心を打った演技は、マルガリータ・マムーンのクラブの演技だ。ロックバンドQUEENのWe will rock youを力強く「踊りきった」のは忘れられない。リオオリンピックから3年経った今も話題に上る程だ。現行の採点規則（2017年

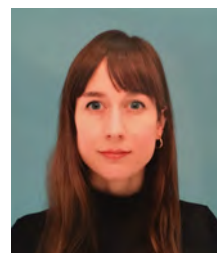
改訂）では、D得点（技術点）の上限がなくなり、手具操作の技術をより多くこなすことで得点が高くなるようになった。現在の新体操の目的は、得点に結びつく技術をより多く確実にこなすことであり、世界トップレベルの選手が自ら「サーカスのようだ」と否定するほどである。その演技は既に「身体と手具と音楽の調和」を失いつつあり、出発点であった「舞踊」も忘却され始めたように感じる。

最後に、私が長年気にかかっていることは、新体操の選手及びコーチは選手の実施するものを「作品」と言わずに「演技」ということだ。英語では“routine”と示される。出発点として「舞踊」を忘れず“performance”や“work”と呼べる演技を見られることを2020年に期待している。

私の研究テーマ

舞踊人類学の新天地へ —— 暗黒舞踏とアフェクト

ケイトリン・コーカー,
Caitlin Christine COKER
(京都大学 人間・環境学研究科 特定講師)



私の研究は、三つの特徴があります。一つ目は、舞台上でのパフォーマンスよりも稽古、すなわち身体の動きを見つけ出す過程に注目することです。二つ目は、共に踊り、ダンサーの経験と人生について聞き出し、舞踊のオーラル・ヒストリーを作成することです。なぜなら舞踊を深く理解する鍵は、ダンサー自身の身体経験を知ること、その実践に潜り込んで身を以て検討することと考えているからです。三つ目は、アフェクト論を用いて考察することです。

この研究はインタビューと参与観察という、人類学的な研究方法を用いていますが、既存の舞踊人類学とは異なっています。その先行研究では、主に舞台上や儀式でのパフォーマンスに焦点を当てつつ、舞踊の文化的意味および社会

的機能を論じる傾向があります。しかし私の経験では、舞踊は意味や機能として解釈され得ないものだと思います。むしろ、舞踊の無目的さや無意味さに意義があると考えています。

私が主に研究してきたものは暗黒舞踏というものです。特に、1960～70年代に舞踏の創始者土方巽と共に暗黒舞踏を展開した舞踏家を対象にしています。舞踏は、舞踊あるいは踊りは何なのかへの問いなおしだったと考えられます。意味や機能として解釈することは彼らの営みの重要な部分を見落としてしまう恐れがあります。舞踏や身体表現は、社会構造に従うものでも、文化として再生産されるものでもないと考えています。偶発的に動く体、その調和した混沌から生まれてくるものだと思います。

その問題意識に立ち、従来の舞踊人類学からはみ出て、舞踏家たちへのインタビューと舞踏ワークショップへの参与観察をしてきました。インタビューは半構造化のつもりでしたが、その内に構造という地図もなくなり、地図の存在しない新天地への冒険が始まりました。

では、その新天地で私は何を見つけたのでしょうか。私にとって舞踏を踊る時の在り方は新しいと感じられました。舞踏の指導言語は、想像豊かなイメージの言葉、いわゆる舞踏譜がよく知られています。舞踏家が舞踏譜またはイメージを通して動きを指導する時、その言語からある考えが窺えます。例えば、英語は主語がはっきりしており、その主語が目的語の何かに対して行為を及ぼす、または受動的に及ぼされるという言語です。これに対し、舞踏での指導言語は主語がよく省かれ、その動態は能動でも受動でもなく、物事が自動生起する場合が度々ありました。普段、起こること、すなわち出来事は、私たちの体の外側にある環境にあり私たちがそれに対して反応するものです。しかし、舞踏での出来事は、踊る人の周囲にも体の内側にも起こるわけです。つまり、体が個人を包む外側との境界にはなっておらず、自然に物事が起こる場になります。そして、それは因果関係もなく突然起こります。したがって舞踏家は舞踏を踊ることを、何かをやろうとせず、やろうとする前には、すでに「なっている」ことだと言います。つまり個人の意図や合理が関係なく、すでに起こっているものです。

この点で舞踏の動きは、社会科学においてここ20年来新しい波を起こしてきたアフェクト論の行動に似ています。アフェクトとは、体と体との間

に流動する一種の影響力です。その影響が様々な感情を引き起こし、さらに連なる人や物に影響していくものです。このように、アフェクトは人々の気持ちと行動を生成させるものです。人間は合理的に行動を選択して、因果関係の中で生きていると思われがちですが、アフェクト論では私たちの理性や意図とは関係なく、世界の物事がいかに繰り広げられるのかを検討します。人間の気持ちと身体経験が、いかに他の人や物に揺さぶられるのかということを考察するものです。舞踏は体を通して見えないものを見えるようにすることであると言われていますが、これは体が動きを通して多大なアフェクトの導管になるのだと考えられます。

このように舞踊研究・人類学・アフェクト論の三つの要素から、舞踊あるいは身体表現の実践では何がどのように起こっているのか、人間の思う「普通」は何なのか、人間はいかに感じたり動いたりするのかを言葉や自らの身体を通して問うてきました。問いかけ、その言葉は体そのものの延長であると考えています。体が動くことで、私たちの世界観は作られていきます。言葉が私たちの世界観から作られているのだとすれば、身体運動があるからこそ言葉が生まれると言えます。舞踊を研究するということは、体という源を探し出すために、言葉の流れを遡り追っていくことだと思います。

今年はこの研究を単行本『暗黒舞踏の身体経験——アフェクトと生成の人類学』として出版しましたが、今後とも身体表現の実践に肉薄し続け、さらなる新天地に足を伸ばそうと思っています。

私の研究テーマ

現代ダンスにおける他者の言語

呉宮百合香
(早稲田大学文学研究科 博士後期課程
／日本学術振興会 特別研究員DC1)



ダンスが言葉を必要とするということは、矛盾であるかのように思われるかもしれません。とりわけ欧米劇場舞踊の文脈では、ダンスは長らく非言語的な身体表現とみなされてきました。しかし、台詞・歌・踊りを組み合わせたピナ・バウシュの例が示すとおり、今日ではダンス作品の中にも積極的に言語的要素が取り入れられるようになり、その定義を問い直し、拡張するものとして機能しています。

私はこのような現代ダンスにおける言語の問題、なかでもダンサーが舞台上で言葉を発するという行為に注目して、研究を行なっています。この問題に興味を持ったのは、ふたつの作品——山田うんのソロ作品『ディクテ』（2011）と、笠井叡とエマニュエル・ユインのデュオ作品『シュピール』（2011）——との出会いがきっかけでした。『ディクテ』は韓国語・フランス語・英語・日本語、『シュピール』はドイツ語・フランス語・英語・日本語と、複数の言語が用いられるこの二作において、観客は語られた内容の全てを把握することはできません。しかしその「理解不可能性」を通じて、コミュニケーションが成立しているように感じたことが、強く印象に残りました。なぜアーティストたちは、観客のみならず時には彼ら自身にとっても理解できない言語をあえて作品中に取り入れるのか、そのような言葉が高度な身体性を備えたダンスと結びついた時に生まれる驚きとは一体何なのか——『ディクテ』と『シュピール』を初めて見た時に浮かんだこれらの問いが、以来研究の原動力であり続けています。

抑圧されてきた言語的要素がダンス作品内に取

り入れられるようになった背景を考えるにあたっては、ダンスというジャンル内部における美学的転換と、現代舞台芸術全体の動向の両方を考慮する必要があります。まず前者については、たとえば呼吸音や足音といったエフォートを舞台上でも隠さなくなったこと、日常的な身振りを動きの語彙の中に取り込むようになったこと、舞台と客席、そして振付家とダンサーの関係が変化し、ほかならぬダンサー自身が「語る主体」となったことなどが該当します。後者については、ジャンルの混淆化が進み、ダンスや演劇、パフォーマンス等の厳密な区分がもはや不可能になってきていること、ポストドラマ的潮流の中でテキストや意味作用を乗り越えるモデルとしてダンスの身体性が脚光を浴びていることなどが挙げられます。言語の再導入を演劇性の復権と見る向きもありますが、とりわけ近年のダンス作品に多く見られる物語の再現や意味の伝達を主目的としない言語の用法は、非ドラマ的とも言え、語の適用には慎重であることが求められるでしょう。

理解を助けるどころか妨げるような、とはいえ理解をまるで前提としていないわけではない言葉のあり方を、私はさしあたり「他者の言語」と名付けています。これには、三つの意味が含まれています。第一に他者が書いた／語った言葉という字義どおりの意、第二に意味を解せない異言語の意、第三に身体にとっての異物、つまり「他者としての言語」の意です。言語は元来、自分とは隔たった存在である他者への情報伝達の手段であるわけですが、その意図的な誤用・変形・失敗などによって、演者間の関係および演者と観客の関係を多層化し、その距離を遊戯的に変化させるような用法に、私は最も関心を抱いています。

他者の言語というテーマはまた、翻訳／翻案という問題も内包しています。まず、他者の言葉をダンスに翻訳／翻案するというレベルが考えられます。言葉と身振りはいずれも呼吸と不可分に結びついており、たとえば他者が書いた言葉を朗読しながら踊る際は、テキストに内在する書き手の身体的リズムが、踊り手の動きのリズムに直接的に影響を及ぼします。語る主体（舞台上で言葉を発する主体）の現前を通じて語られる主体（語られるテキストの中の主体）の不在が顕在化する、つまり言葉を介して「不在の他者」が浮き彫りになるというのも、興味深い点です。次に、ある言語に基づいて作られたダンス作品を他言語に翻訳／翻案するというレベルがあります。言語と身振りはともに社会文化的に習得されるものであり、その意味にお

いて、身体性は言語と一体化していると考えることができます。他者の言語を前に、元の言語と結びついた身体性をいかに翻案するかという点は、言葉を用いたダンス作品の新たな展開を示すように思われます。

翻訳の真の豊かさは、他者に対して開き、対話し、時にはその異質性と格闘し、混ざり合い、自らの変容することにあると言われますが、ダンスにおける言語も、そのような潜在的可能性を秘めているのではないかと考えています。以上の点を2000年代以降の具体的な事例に基づいて考察し、「他者性」という切り口から現代ダンス作品における言語の特質を明らかにすることを博士論文の目標としています。

私の研究テーマ

私の研究テーマについて

石渕 聡（大東文化大学 教育学科 准教授）



みなさん、こんにちは。ダンスカンパニー・コンドルズダンサー、近未来的SFファンタジーバンドSoleil de la Nuitのギタリスト兼作詞作曲ア レンジ担当、南仏トゥールーズ周辺に嫁いだ日本人のための盆踊り大会開催委員（和太鼓&三味線担当）、大東文化大学文学部教育学科（身体表現研究室）の石渕です。肩書きをずらずらと並べる人間は、大抵いかがわしいことが常ですが、何卒しばしの間、お付き合いください。今回は、自分の研究テーマについてエッセイを書くというお題をいただきました。

舞踊研究は、本学会誌『舞踊学』のバックナンバーをざっと眺めるだけでも、それがいかに多くの分野をもっているかを容易に感じることができます。教授方法や授業研究などの体育学や運動的側面を運動生理学やキネ

ティクス／動作学などからのアプローチ、バレエやモダンダンス、舞踏等の歴史的研究、民俗／民族舞踊の民俗学文化人類学的研究、舞踊セラピーなどの心理学的研究、また、文学研究になぞらえた作品作家研究など、さらに、身体論やメディア論、他の芸術作品のメタファーとしての関連、CMやプロパガンダとしての舞踊等の社会的側面との繋がりなど、舞踊を取り巻く周辺の事象を含めていけば、人間の行為全てに広がるといっても過言ではないぐらいに、舞踊の研究分野は、広大な領域となっています。

そんな中で、私が大学院生の時に選択した研究テーマは舞踊の美的研究でした。元々、群馬大学教育学部を卒業して、早稲田大学の演劇科の修士課程に進んだ際には（大学院進学動機は、半分は当時始めたばかりのモダンダンスを踊る時間と場所が欲しかったという事実もあり

ますが)、民俗芸能研究のために、日本演劇ゼミに身を置いていました。研修生として入り込んだ年と修士課程の初年度に当時VHSのテープが入る大きなビデオカメラ一式背負って約40箇所の神楽のフィールドワークを進めていました。そんな中、ひょんなことからインド舞踊のバラタナティウムを1年間ほど、習うようになって、どうせなら、自分が踊っているダンスを研究したいと感じて、テーマを神楽研究から、バラタナティウム研究に変更したのです。

ところが、修士課程の二年生の時、そろそろ年度も終わりの時の、研究室の飲み会か、何かの学会の帰りだったと思います。よく一緒におつきあいさせていただいた、熊手先輩とドイツからの留学生のリスクティン・ニコラさん、あと、研修生の渡辺さんと飲みながら話をしていの中で、修士論文のテーマ話となって、私が、インド舞踊は自分でも実践しているから研究テーマに選んだ旨を3人に話したところ、「石渕くんはインド舞踊よりもモダンダンスを長くやっているのに、なぜ、モダンダンスの研究をしないのか?」と、非常に素朴な事を指摘されたのです。それまで、日本演劇ゼミに所属していたので、洋舞を研究テーマとして選ぶという頭がまったくなかったことに、愕然として気づいたのです。自分が研究テーマを西洋舞踊に変更したい旨を担当教員に伝えて、修士三年目から古井戸秀夫先生に指導を引き受けていただき、当時、古井戸先生から「市川雅先生という有名なダンスの研究者であり舞踊批評家があなたの指導をしてくださるそうだから、毎週木曜

日のゼミ演習の時間は、大学のゼミ指導には来ないで市川先生の家に行って、個別指導をしていただきたいなさい。」という、今思えば、ものすごい贅沢な環境で、舞踊研究のスタートを切ることができたのです。それから修士4年で修論を提出するまで、2年間、授業期間は毎週市川先生宅に通い詰めていました。

市川先生宅では、先生が英語の短い論文(だいたい10ページぐらい)を選んで、翌週にそれを全訳してレポートするということが毎週の常でした。それがきっかけとなり、美学芸術学に関して全くの初学者であった私は、全てをゼロから学んでいきました。特に、マクシーン・シーツの『舞踊の現象学』と出会って、シーツ自身がその中で問うている「ダンスを見る時、観客は何を見るのか。」という一見、禅問答みたいですが、一つの問いが、様々な問題を浮上させてくる面白さに、美学や哲学がもっている「ものの考え方や捉え方そのもの」を研究していく様(自分の研究の根本)を見いだすことができました。

博士論文では「舞踊の意味を生成するものとしての身体」(後に『冒険する身体』として加筆訂正出版)で、舞踊の現象学的な考察をまとめました。博士論文の内容は貫成人先生になんども細かく丁寧にチェックしていただき(新宿の喫茶店に5時間ほどいたこともあります)、今現在でも、その時の指導内容が、自分の研究課題となっているような状態です。今後も、現象学的な発想を大切にしながら、舞踊を哲学美学的な視点から考えていきたいと思っています。

舞踊関連書籍紹介

■中島那奈子・外山紀久子 編著 『老いと踊り』東京、勁草書房、2019年2月

■ケイトリン・コーカー 著『暗黒舞踏の身体経験——アフェクトと生成の人類学』京都、京都大学学術出版会、2019年3月

■李賢峻 著『「東洋」を踊る崔承喜』勉誠出版、2019年2月

■毛利三彌・天野文雄 編著『東アジア古典演劇の伝統と近代』東京、勉誠出版、2019年4月

■Isabelle Launay, Sylviane Pagès, Mélanie Papin et Guillaume Sintès, *Danser en 68 : Perspectives internationales*, Montpellier : Deuxième époque, 2018.

■Marie Bardet, Isabelle Ginot et Joanne Clavel, *Écosomatiques*, Deuxième époque, 2019.

事務局だより

会員の皆様へ

2019年度より、学会事務局は
筑波大学体育系寺山由美研究室に移りました。
3年間、どうぞよろしくお願い申し上げます。

舞踊学会事務局

〒305-8574

茨城県 つくば市天王台 1-1-1

buyogakkai@gmail.com

その1. 年会費納入のお願い

振込だけでなく、現金の納入も受け付けております。例会
や学会会場でも受け付けております。お気軽に事務局までお
声掛けください。

その2. 登録情報変更申請のお願い

住所、勤務先等に変更のある方は、学会 HP の「各種事
務手続き」から「会員情報の変更申請（会員限定）」のペ
ージにて変更後の情報をお寄せ下さい。

もしくは、事務局までメールでご連絡下さい。

その3. メーリングリスト登録のお願い

本学会では、様々なご案内・ご連絡等を、メーリングリストに
て配信しております。登録をご希望される方は、事務局までメ
ールでご連絡下さい。

揭示板

< 祝 >

舞踊学会（元）会長、古井戸秀夫先生が御著書『評伝 鶴屋南北』（東京、白水社 2018年）を出版、平成30年度読売文学賞（研究・翻訳賞）、芸術選奨文部科学大臣賞（評論等部門）をダブル受賞されました。古井戸先生、誠におめでとうございます！

全2巻 約1600頁にわたるこの大著は、菊池信義氏による粋な装丁に、前後に引き出せる型破りな帋入りです。テキスト資料を詳細に読み込むことによって生き活きと甦る南北像もさることながら、江戸の町の賑わい、そこに生きる人々の息遣いが伝わってくる見事なご本です。

【編集後記】

・ダンスとスポーツは古代ギリシャの時代から深い関係で結ばれています。来年はオリンピック、パラリンピック開催の年でもありますので、小さな特集を組んでみました。

・第11号から3年間の任期で編集を担当させていただきましたが、今号が最後となりました。短い間でしたが、ご愛読いただきありがとうございました。また、ご執筆いただいた先生方には、お忙しいところご協力誠にありがとうございました。今年12月発行の17号からは波照間先生に編集長をバトンタッチいたします。編集委員も少し変わり新しいメンバーでお届けすることとなります。引き続きニューズレターをよろしくお願いいたします。（國吉）

・私が編集委員の間に、薄井先生にインタビューしたがその後彼の追悼文を書くことになった。今後は一読者として、このDLがどこを目指すのか内容を楽しみに拝読させていただきます。（松澤）

・AS（アーティスティック・スポーツ）を対象とする舞踊学的研究が高まることを期待したいと思います。町田先生、興味深いご指摘をありがとうございました。

・3年間、國吉先生のもとで編集の方法を学ぶことができ貴重な経験をさせていただきました。17号より編集のとりまとめ役を担当いたします。微力ながら精一杯つとめたいと思います。次期編集委員は、外山紀久子先生、譲原晶子先生、宮川麻理子先生、安達詩穂先生、小林敦子先生です。よろしくお願い申し上げます。（波照間）

・特集記事を拝読しながら、スポーツする身体の美、ダンスの美について思いを巡らせました。また、次号以降も編集委員を務めさせていただくことになりました。引き続きよろしくお願い申し上げます。（宮川）

・実践において、ダンスの芸術的側面とスポーツ的側面について、日々考えることがありますが、とても興味深く、新しい視点をいただけたと感じました。次年度も編集委員補助として勉強させていただくこととなりました。よろしくお願い申し上げます。（安達）

ニューズレター第16号

発行日：2019年6月4日

編集：國吉和子 松澤義信 波照間永子

宮川麻理子 安達詩穂（編集補助）

発行者：舞踊学会（会長：猪崎弥生）

ご意見、ご感想、揭示板への投稿希望は以下の
アドレスまでお願いいたします。

ニューズレター編集委員会

danceresearch.newsletter@kagoya.net